

原 著

T. D. ウッドの新体育論における「自然な体操 (natural gymnastics)」の 教授方法上の問題に関する一考察

A Study of the methodological problem of “The Natural Gymnastics”
in T. D. Wood’s Theory of New Physical Education

新野 守¹⁾

Mamoru Shinno¹⁾

Abstract

T. D. Wood proposed his ideas on natural gymnastics in the New Physical Education in 1927. When analyzing it in terms of teaching method, it was considered reasonable to interpret the natural gymnastics as the problem-solving method to attain the necessary skills and techniques of sports. But it was eventually interpreted as “preparative activities for the games of sports,” or just “gymnastics”, because the connotation of gymnastic gave the teachers and children only the image of the technical exercises, and it had no teaching of tactics and strategies of sports which had better chances to give the reflective thinking to the children in the group works than technical exercises. Therefore, the natural gymnastics was easily practiced as teaching material not as teaching method.

キーワード 自然な方法, 自然な体操, 問題解決方法
natural method, natural gymnastics, problem-solving method

I. 序論

1. 研究の動機

戦後初期, アメリカ教育使節団の報告書に沿った『学校体育指導要綱 (1947)』が制定され, これに基づく学校体育の実践が全国的に行われた (井上, 1970, pp. 158-160)。また, 前川峯雄をはじめとする体育研究者がウッド, ヘザリントン等のアメリカ新体育論の紹介を行った。前川は戦後体育の目標が軍国主義からの個の解放と民主主義社会建設者の形成にあること提示し

た。学校体育の実践では, アメリカ教育使節団報告書の勧告に従い, 指導要綱にそって教師によるカリキュラムの自主編成が行われた。「目標と発達の交点に教材や具体的学習内容を求め」, 「そこから単元を構成し, 学習活動を通して具体的学習内容を習得し, 経験をまとめその結果を評価すること」が行われた (岸野, 1983, p. 277)。体育の目標や内容の検討に比べて, 教授 (学習) 方法の検討が遅れた点に関して, わが国では戦前の一斉指導の弊害や施設用具の不備が指摘されているにすぎない (岸野, 1983, p.

¹⁾ 関西大学

Kansai University

248)。このように、アメリカ新体育論が戦後日本の体育実践に大きな影響を与えたが、アメリカ新体育論の中心人物の一人がT.D.ウッドである。したがって、アメリカ新体育論に基づいて実践された日本の新体育が現場の混乱を起こした要因については、日本の社会的問題だけでなく、ウッドの新体育論の理論的問題、特に教授方法の問題を明らかにすることが必要であると思われる。

2. 先行研究の批判的外観

これまで「自然な体操」については、以下のような見解がある。ウェストン (Weston, A.) は、ドイツ体操やスウェーデン体操が「新体育、自然体育プログラム (natural program)、自然な体操と呼ばれるものの挑戦を受けることになった。」と、「自然な体操」が新体育論の重要な要素であったことを指摘した (Weston, 1962, p. 51)。また、小田切は、目標との関連で、「自然な体操」が「『個人の興味、能力、技能の調和のとれた発達』を目指した体操」であり「目的にあった技術でおこなわれる。そして体操をおこなう生徒たちがその運動の重要性を理解していて、自分たちで動きを工夫できる、というような基準にあった活動で」あったと解釈した (小田切, 1981, p. 167)。ライス (Rice, E. A.) は教材との関連で「自然な体操」は「職業、競技、ダンスなどの運動の基本的な技術に基づいており、授業で利用できるように体系化された体操運動を構築しようとする試みであった。」と教授内容の面を明らかにした (Rice and Hutchinson, 1958, pp. 283-284)。また、小田切は「授業の内容 (主要運動) に見合った準備運動として、いわゆる特定の意味を持った体操が行われるべきだとみなされていた」と「準備運動」として解釈した (小田切, 1975, pp. 156-157)。そして、マクファーソン (McPherson, Frances A.) は「自然な体操」が「体育プログラムのほとんどの教材 (aspects) で、たとえばスポーツ、ゲーム、遊戯では準備運動として、またダンスでは基礎運動 (basic movement) あるいは基本的調整運動 (fundamental coordination) と同一視

されたのである。」と新体育の重要な教授内容をなしたと解釈した (McPherson, 1965, p. 162)。これらの研究は「自然な体操」を「教授内容」としてとらえ、「教授方法」として捉えてはいなかった。

リー (Lee, M.) は、「自然な体操」が新しい教授方法として、社会的に与えた影響について、「支持者が多数現れたが、彼らはデューイやウッドの哲学についての理解が欠けており、旧い体操への嫌悪感から、またジレンマからの脱出手段として、ウッドの自然な体操に飛びついてしまった。」と指摘した。同時に、「新しいアイデアにふさわしい手続きを考案する技術に欠けていたために、体育の授業時間は、生徒がほとんど運動せず、社会心理的目標だけでなく生理的な目標をも獲得することもなくなってしまった。」と新体育の指導が実質的に放任主義に陥り、学ぶものはないとの批判を受けたことを指摘した (Lee, 1983, p. 170)。しかし、具体的な資料や文献は提示していない。また、「自然な体操」は「ウッドがスタンフォード大学時代から実践し、ヘザリントンやウィリアムズによって引き継がれ、多くの教師によって、既存の形式的な体操指導に代わり生徒の興味や関心を喚起する新しい教授方法として全面的、部分的に導入された。しかし、遊戯やスポーツが社会的認知を受けるようになると、省みられなくなった。」とスポーツ普及の影響を指摘している (Lee, 1983, pp. 170-171)。ウィリアムズは「『自然な体操』が、教授方法としては本来の活動自体の習得を促すための補助である。」述べている (Williams, 1927, p. 259)。ウィリアムズは、初版の目次には「自然な体操」の項目を設けているが、5版、7版、8版では設けていない。ヘザリントンの「基本的教育 (1910)」「大学競技問題の分析 (1906)」「プレイスクール (1913)」「学校体育プログラム (1922)」には「自然な体操」の記述は見られない。このように、先行研究において、「自然な体操」は「準備運動」や「体操」として実践され、スポーツの普及とともに一時的なブームに終わったことが指摘されているが、具体的な体育実践やウッドの体育論

との関連については明らかにされていない。

3. 問題の所在

著者はこれまでウッドの体育論について以下のようなことを明らかにしてきた。アメリカ新体育論の主導的な人物の一人が、トーマス・デニスン・ウッド (Thomas Denison Wood, 1865-1951 以下ウッド) である (Weston, 1962, p.154)。ウッドは、デューイ (J. Dewey) の教育学やソーンダイク (E. L. Thorndike) の心理学の理論を体育の基礎科学として位置づけ、体育論を教育現場で実施可能な体育プログラムにまで具体化する課題を『新体育 (1927)』において提示した (小田切, 1975, p.247)。

当時のアメリカは、南欧・東欧の新移民の急激な増加が社会問題となっており、学校教育において移民児童のアメリカ社会への適応のための教育が求められていた。そして、教会やYMCAなどの社会教育団体が新移民の帰化に向けて活動を開始していた。こうした社会状況の中で、ウッドは、体育が「自己実現の教育」であり、移民の社会的適応に貢献することができると考えていた (新野, 1989, p. 52)。そして、「健康サービス」「健康習慣」だけでなく、「健康教育」の確立にも貢献した。国民の健康を国家資源と捉え、体育においても子どもの健康を運動による副産物として二次的に重視した (新野, 1993, p.9)。特に、第一次大戦に伴う徴兵不合格者多数の健康・体力問題を学校に体育を導入する推進力として位置づけた。また、ウッドは『新体育 (1927)』において遊戯やスポーツなどの自然な活動を教材に採用し、体操の形式的な教授方法ではなく、プロジェクト法や問題解決学習により、アメリカ市民の形成を体育目的に位置づけた。そして、これを「自然化された体育 (naturalized physical education)」と命名した (新野, 2011, p. 21)。

著者は、これまで「naturalized」(帰化させる) (注1) 概念の視点から、ウッドの体育論の特徴が南欧・東欧移民児童のアメリカ社会への適応を意図した「市民形成」であること、「自然な方法 (natural method (注2))」はプロジェクト法や

問題解決法と同様に、学習過程として①問題の自覚、②討議・データ収集、③考えの構成、④不要な考えの排除、⑤考えの実践検証から構成されていたこと、さらに、これに基づく体育独自の教授方法として「自然な体操」が提示されたことを明らかにした。また、「自然な方法」と「自然な体操」の関連を指摘したが、「自然な体操」の具体的な教授方法上の問題については明らかにしていなかった。

4. 研究の目的と方法

「自然な体操」が体育現場で、準備運動や体操として実践された要因は、ウッドの「自然な体操」が教授方法として理解されていなかったことにあると考える。また、「自然な体操」がウッドの体育論において目的、内容、方法、評価と十分に関連付けられていたかということが考えられる。したがって、本研究では、ウッドの教授方法上の問題を体育の授業実践やウッドの体育論との関連で明らかにすることを目的とする。

「自然な体操」の教授方法上の問題を明らかにすることは、アメリカにおける「自然な体操」の立ち遅れ要因の究明とともに戦後日本の新体育の教授方法の検討の立ち遅れ問題を考察するための基礎的知見を提示するものと思われる。

本論では、ウッドの著作、特に『新体育 (1927)』における体育独自の教授方法である「自然な体操」の特徴について明らかにする。次に、体育の授業記録の検討を通して「自然な体操」の教授方法の実践的問題を明らかにする。体育実践の授業記録は、体操が支配的な頃の実践(フォザリングガム (Elizabeth Fotheringham)), 競技スポーツを統合する試みの実践(ブレイス (D.K. Brace)), 最後に問題解決学習の形成をめざしたと思われる実践(オークランド市の授業記録)を検討の対象とした。

II. 本論

第1節「自然な体操」の教授方法論

ウッドは、進歩主義教育の教育方法として普

及していたプロジェクト法や問題解決学習法の基礎理論を新体育の教授方法に援用した。そして、体育独自の技術学習については「自然な体操」と名付けた教授方法を提案した (Wood and Cassidy, 1927, pp. 105-109)。

ウッドは、1891年の初任地スタンフォード大学で「自然な体操」の実践を始め、『健康と教育 (1910)』において「体操技術 (gymnastic technique)」の用語でこれを表現した。「自然な体操」は「大きな力や技能を獲得するために実際の自然な動きに含まれ、また関連している個々の動きを練習する (Wood, 1910, pp. 87-88)。」反復練習の一形態であった。この時、ウッドは、「自然な体操」の技術的側面を強調していた。つまり、スポーツの技術的構成要素の部分的練習を自己目的的に行うことは体操の個別の運動練習と同じである、と当時支配的な体操支持者達の意識変革を喚起したのである。また、「自然な体操」という教授方法は個人の自然な欲求を充足するので、個の能力の完成である自己実現につながると考えていたのである。

ウッドは、『新体育 (1927)』において「自然な体操」を「合理的に管理され統制された運動の練習であり、子どもにとって自然化された活動を向上させる手段として価値があるもの (Wood and Cassidy, 1927, p.87)」と定義した。ウッドは「自然な体操」が「自然化された運動」、すなわち「スポーツ」の技術獲得の手段であることを強調して、当時支配的な競技スポーツ支持者達の注意を喚起したのである。すなわち、ウッドは、「自然な」という言葉によって「体操の形式的・機械的要素」を否定すると共に「スポーツの解放的・創造的要素」を強調していたと解釈することができる。

ウッドは、「自然な運動」と「自然化された運動」の関連について「野球やサッカーは民族とともに古いという意味では、自然な運動ではないが、投げる、走る、といった民族的に古い運動 (racially old elements) を含んでいるので、厳密に言えば、それらは自然化された運動である。(Wood and Cassidy, 1927, p. 87)」と述べている。そして、「自然化された運動」を合理的

に行うための運動の系列を技術と見なし、生徒の要求に根ざした技術練習の活動を重視して「自然な体操」と命名したのである。

著者は「自然な体操」が単なる準備運動ではなく、技術獲得のための問題解決学習であると解釈するのが妥当と考えている。それは、ウッドが「自然な体操」について以下の4つの基準を想定しているからである (Wood and Cassidy, 1927, pp. 105-106)。第1に「その運動は人工的に考案された運動ではなく、自然な、本能的運動から構成され」、第2に「その運動は子どもにとって明確な理由のためになされ」、第3に「子どもは運動や練習の目的を理解し」、第4に「その運動は望ましい技術の練習になっている」こととしたことによる。また、「自然な体操」は、それ自体完全な運動ではなく、その目的とする問題解決のために問題の一部を練習するのであるから、形式的体操のように唯一の単位として課してはならない。つまり、「自然な体操」はスポーツ、ダンス、スタンツ^(注3)、などを上手に行うための手段である。」ことによる (Wood and Cassidy, 1927, pp. 106-107)。

また、先行研究 (新野守 (2011, p.28)) で述べたように、「自然な体操」は、他教科の教授方法と同じく、次のような5段階で構成されていた (Wood and Cassidy, 1927, pp. 222-227)。

- 第1段階は、「問題の自覚」
- 第2段階は、「問題の分析」
- 第3段階は、「ゆっくりした練習」
- 第4段階は、「簡易のゲーム」
- 第5段階は、「ゲーム」

第1段階で、子どもは問題を自覚して、第2段階で問題の分析を行い、自分の方法的分析的判断能力を獲得できるようになる。つまり、自分の運動を客観的、分析的に見ることができるようになる。第3段階では「運動分析に基づき、ゆっくりした練習形態を考案し、実際のゲーム場面を想定して、号令でなく、打て、走れ、などの具体的指示により練習し、技術の獲得や向上を図る。リズムが重要な要素であるが、それはゲーム場面や子どものリズムと一致しなければならない」としている。第4段階のゆっくり

した練習はリレー形態の採用により実戦に備えた速い動き、簡易のゲーム形態へと進む。リレー形態は完成度を高め、それまでの練習を試すこともできる。生徒は、リレー形態において練習すべき技能の要素を一層自覚できるようになる。第5段階の「ゲームは完成した活動単位でもあり、子どもの目標であるが、同時に、出発点でもある。ゲーム終了後、問題の自覚、運動の分析、練習、簡易のゲームが繰り返される」。つまり、ゲームは作業であるが、興味と楽しさが犠牲にされてはならないとしている。

このように、ウッドの「自然な体操」は一般の教授方法が体育に応用されたものであり、体育の目標、すなわち身体運動による身体的発達や社会的能力の形成に留まらず、認識能力の形成を達成する教授方法でもあったと考えるのが妥当であると思われた。しかし、後述するように「準備運動」や「体操」として理解されてしまったのである。

次に、この「自然な体操」が教育実践においてどのように行われ、その教授方法の問題点が何であったのかを明らかにする。

第2節「自然な体操」の実践

1. フォザリングガムのリレーの実践 (1908)

ウッドが所属していたコロンビア大学教育学部附属学校のホーレスマン・スクールの実践記録^(注4)によると、1905年から1913年に至っても同校の体育カリキュラムは、徒手体操 (free gymnastics) や器械体操 (apparatus work) が中心で授業の約半分の30分を占めていた。そして、残る30分は遊戯やゲームが教師の指導とは関わりなく、生徒の自由選択に任されていた。遊戯やゲームは他教科の緊張から生じるストレスを発散する場であり、運動の再生機能が期待されていた。

1908年の記録は、小学校のカリキュラム特集号で、第4・5学年の授業記録には教授方法の具体的な記述が見られる。専門教師 (special teacher) として体育を担当したエリザベス・フォザリングガムは、その中で4年生のリレー競走の実践について、当時としては斬新な実践記録

を残している。

「我々は、この短い記録において、4・5年生の体育館での授業実践を2例提示するが^(注5)、この実践で授業の観点の変化が概ね理解していただけると考えている。クラスは4班に分かれ、教室の片方に一列に並ぶ。列の先頭から15フィート離れた地点がゴールで、目印を置く。合図とともに4人が一斉に走り、ゴールを回って帰る。全員が走り終わったところで、各組の一位だけが集まり、再び競走をする間に、他の生徒はどうすれば速く走れるようになるのかを観察する。生徒にとって競走に勝つことが外見的な目的のように見えるが、ゲームの本当の価値は成功や失敗の原因を発見することにある。ゲームの最も重要な点は、子どもが必要とされている条件を充たすために不可欠な協力ができるように適応することである。(Fotheringham, 1908, p.301)」

まず、フォザリングガムの実践では、各組毎の「個人の競争」で走運動の技術構造と勝敗との関係に子どもの注意が払われている。次に、リレーで勝つために各人の能力を発揮できるよう調整することが課題となる。

「次に、どのようにその諸要素を関連づけていけばいいかということ、つまり個人対個人の競い合いではなく、チーム対抗による活動につなげていく段階にはいる。ここで多くの新たな問題が生じる。個々の子どもにとって協力することで努力は少なくなるが、調整の問題が大きくなるのである。子どもはゴールを目指して行動するだけでなく、仲間と関わりながら行動しなくてはいけないことに気づく。このように一人の子どもは他の仲間の営みから学ぶことができるようにされている。(Fotheringham, 1908, p. 301)」

つまり、子どもは問題解決に向けてグループで協力することを学ぶようにされている。

「子どもが取り組んだ問題から得た知識や興味をさらに継続させるためにゲームが次々と展開される。新たな問題は、以前のものよりも能力を必要とするのが常である。このようにして子どもはスタートの位置が大事であるとか、走

るとき、ある子どもは他の子どもより腕の使い方がうまいことに気づく。このような点が活動の技術的側面になるのである。(Fotheringham, 1908, p.301)』

すなわち、フォザリングガムの実践では、ゲームで問題解決方法の妥当性が検証され、さらに改善し、工夫を重ねる中で走運動の技術認識が興味をともなって深められるようにされている。

「体操プログラムも、わが校では、ある程度まで、従来型 (conventional) のプログラムにあわせて配置されていた。しかし、我々が望むのは単なる運動の解剖学的な進歩ではなく、子どもが取り組むときの考えを継続できるようにするための運動効率の発達であった。子どもがしなくてはいけないことは、もし子どもが技術練習で本当の興味を獲得するのであれば、子どもの運動技術と行動で表現しようとしている思考とを関連づけることである。体操は、子どもが努力している目標への手段として価値があるのである。我々はこの技術と関連した運動練習を学校に提案してきた。」としている。すなわち、「自然な体操」は、子どもの学校生活の諸活動から展開されるが、重要な点は「子どもの運動技術と行動で表現しようとしている思考とを関連づけること」であった (Fotheringham, 1908, p.302)。

フォザリングガムは、リレー・ゲームが走運動の問題発見の手段であり、生徒がお互いの走り方を観察し、走運動の技術的要素が個人的に異なることに気づき、どうすればリレーでより速く走ることができるかをグループの協力により考えさせるところに「自然な体操」の教授方法の特徴を見出していたと見なすことができる。つまり、グループ活動の中で子どもの「速く走りたい」という「興味・関心」は、教師の問いかけにより「走運動の技術的問題の解決」の「必要性」にまで深まり、相互観察と討議の中で認識能力と思考能力の発達が促され、練習やゲームにより思考の妥当性が検証される。また、これによって、子どもの社会的行動適応能力が、結果的に形成されるとするものであった。

ウッドは、「体育館やプレイグラウンドで行われる運動の心理学は、教室や実験室、スタジオと同じ原理や要素を含み、ある場合にはより豊かな内容や重要な結果をもたらす。(Wood and Cassidy, 1927, p.3)」との考えの基に「学習の法則」「転移の法則」「本能修正」などの心理学の成果を体育の教授方法に転用しようとした。そして、「どの教科の学習 (study) も、その教科の活動方法にある。つまり、学習とは、その当該分野の考え方を知ることである。(Wood and Cassidy, 1927, p.208)」と学習の方法を学ぶことの重要性を指摘した。また、新体育の教授方法について「大脳・筋活動 (big brain-muscle activity) には思考をともなう内容が存在し、子どもは、この分野において学習の方法を学ぶことができる」と考えていた。フォザリングガムの教授方法には、ウッドの教授方法論が影響していたのである。

したがって、フォザリングガムの4年生のリレー実践記録から、また当時支配的であった体操が心理学の研究成果によって再解釈され、個人の認識能力の発達だけでなく社会性の発達を促すグループ学習の重要性がすでに一部の教師の間で共有されていたことが分かる。

そして、フォザリングガムの進歩的な実践を可能にしたものは、「子どもの健康と身体発達は、ホーレスマン・スクールの教育制度の重要な要素である。体育は伝統的な教科と同様の意義を獲得しており、正規カリキュラムにその位置を占め子どもの日課の一部を形成している。(Fotheringham, 1908, p.426)」と体育の教育的価値が学校全体で共有されていたことであった。

2. ブレイスのバスケットボールの実践 (1925)

ウッドは、『新体育 (1927)』において「自然な体操」の実践例としてウッドと同じコロンビア大学の体育指導者であるブレイスの実践を示した^(注6)。それはバスケットボールのチェストパスの練習に関する技術練習で、ブレイスのコーチとしての体験に基づいて行われていた (Wood and Cassidy, 1927, pp.242-243)。

①クラスは「離れて！」(keep away) というゲ

ームをする。クラスの人数の許す限りたくさんの生徒がゲームをする。

②指導者は、しばらくしてからゲームを止め、チェストパスが素早く、正確であるので最も成功するパスであるとの反応を生徒から得る。

③それから指導者は、この種のパスについて注意深く説明してから、この動きをグループ毎に体験させる。この「自然な体操」は、求められているものが何であるか生徒が分かるまで続ける。

④次に、クラスはジグザグパスの隊形にはいる。生徒は、約20ヤードほど離れて真っ直ぐに向かい合って並ぶ。生徒が何度もボールを操作するように、前列から最後尾までボールを何度もパスする。この間指導者は、パスのコーチをする。

⑤次にどのチームのパスが一番上手かを試すための競争形式、あるいは、どのチームのパスが一番早いかを比べるペアー間のリレー競争のような、様々なスタンツが用いられる。

⑥もう一つの練習形態は、円陣パス (corner formation) である。あるチームが半円になり一人が15ヤードほど離れて立つ。真ん中の一人がボールを半円状の一人一人にパスをする。この形態でパス競争をしても良い。

⑦チームをジグザグフォーメーションに並べ、ボールはライン越しにパスされ、パスした生徒はラインを超し反対側に並ぶ。

⑧それから、生徒たちは最初のゲーム、つまり「離れて！」に戻る。プッシュパスだけを用いる。生徒は習いたての技術の練習をするように励まされる。

ブレイスの実践には、ウッズの「自然な体操」の学習過程で中心的要素である生徒の自主的な技術の考案や工夫が見られない。それは、ブレイスのコーチとしての体験から競技スポーツの指導方法の影響を受けていたためであったと考えられる。

ブレイスは、別の論文で上記の練習形態について「自然な方法」の科学的根拠を次のように述べている (Brace, 1925, pp. 204-205)。

「スポーツ参加の機会を与えるだけでは十分とは言えず、体育プログラムは学生全体に対し

て上述のスポーツ活動の基本的な技術と知識を与えなければならない。これには学生の組織化と教授方法が含まれる。……優れた自然なプログラムの教授方法は、優れたフットボールコーチの例に見ることができる。第一に、生徒は行う活動を選択するのであり、強制されない。生徒はゲームのルールやプレイの仕方についてはある程度知っている。コーチは基本的な技術の練習を与える。コーチは、この練習が実際のゲームに近くなるように、ちょっとしたスタンツや競争を工夫する。それからコーチは、練習したばかりの技術が実際にゲームで使えるように生徒にゲームを行わせる。同時にコーチは欠点に気づいたときには、技術が完全に習得できるように他のスタンツや競争の課題を工夫する。それからまたゲームで試してみる。」

これは、競技スポーツにおける技術練習の方法を述べたものであり、コーチ主導による生徒の技能評価に基づき必要な技術課題を部分的・段階的に処方したものである。また、体操の教授方法をスポーツの教授方法に応用したものである。教師の主導性が強調されたことは、「自然な体操」が合理的・効率的な技術練習として受け入れられる要因になったものと思われる。自然化されたプログラムの教授方法としての「自然な体操」は、生徒の問題解決学習としてではなく、ウッズがスタンフォード大学で提唱した「体操技術」と同じものとして、つまり技術練習を目指す「準備運動」として解釈されていたと考えられた。

「体操や器械体操からプレイやゲームへの転換期の初期には、授業計画の指導方法は、ほとんど存在しなかった。授業計画はしばしばプレイ計画のままであり、教授方法や段階的に経験を与えていく方法には何の関心も払われていなかった。指導方法が重視されるようになったのは、体育教師が生理学、心理学、教育学、社会学に十分な知識を持ち、それらの知識を教授方法へ意識的に応用するように、専門的に養成されてからのことである。(24) (Van Dalen and Bennett, 1976, p. 456)」とのヴァン・ダーレンの見解は著者の解釈を支持するものである。

3. オークランドのバレーボール実践 (1927)

オークランド市の公立学校でのバレーボール実践は、問題解決学習の教授方法を具体的に例示したものとして『新体育 (1927)』において詳細に提示されている^(注7)。

「第7・8学年の生徒が男女別のグループに編成され、また、授業では「自然な体操」の5段階が用いられた。授業のはじめに、子どもたちはバレーボールの経験の有無について尋ねられた。子どもたちは、前の学年で少しだけバレーボールをしたと答えた。子どもたちによるプレイデイの話し合いがもたれ、バレーボールはプレイデイの競技種目の一つなので、上手になる必要があることが強調された。それから、子どもたちはサイドを決めてゲームを始めた。しばらくして、教師がゲームを中断して子どもたちを集め話し合いに入った。

先生：ゲームに何か問題がありますか？

生徒：ゲームが続かない。サーブでボールがまっすぐ飛ばない、届かない、ネット上のボールを打てない。ボールを思うようにあげられない。チームワークが悪い。(様々な答え)等。

先生：これらはどうすればいいのでしょうか？

生徒：練習すればいい。(Wood and Cassidy, 1927, p.233)」

ウッ드의「自然な体操」では、これは、教師が質問によって子どもたちに問題を自覚させ、その解決に向けた問題の技術的分析の必要性に気づかせる過程である。

「グループはそれから、教師からの指導をほんの少しだけもらって、ゆっくりと、注意深く練習する諸要素について取り組んだ。子どもたちは運動を考案し、それから次の順序で運動の練習を設定した。そして、バレーボールのゲームが上手になるようにするための練習であることを理解していった。

①行進と駆け足。

②バレーボールのサーブ、(ゆっくりとボールの感触を確かめながら)

a. 一歩後に足を引く。

b. ボールをトスする。

c. ボールを打つ。

d. 次のサーブに備えて、足を閉じる。

③その場で高く跳ぶ。

④高く跳んで左手でボールを打つ。

⑤高く跳んで右手でボールを打つ。

⑥高く跳んで両手でボールを打つ。

子どもたちはウォーム・アップとして1番目の運動から始めることに決めた。2番目の運動は子どもたちにはゆっくりとした動画のように見えた。3番目の運動を1, 2回した後で、子どもたちは両手を横に置おくと両手が開いてお互いに手がぶつかるので、両手を腰に置くことに決めた。子どもたちは、ゲームをする前に、毎回しばらくの間この詳細な運動を一生懸命に練習した。ゲームを試してみると、更に練習が必要なことが分かった (Wood and Cassidy, 1927, pp.233-235)。

これは「自然な体操」の学習過程の第3段階「ゆっくりした練習」である。サーブの練習が、部分的段階的に身体各部の動きと関連づけられて行われていたことが分かる。

子どもたちは、その後打つ目標を改善するためにリレー・ゲームを考案した。「子どもたちは、時間節約のために行進はチーム隊列ですることに決めた。子どもたちが考案したゲームというのは、それぞれのチームが二列に向かい合って並ぶものであった。笛の合図で、一列目のリーダーがボールを相手の列の1番目の選手にサーブを打つ。すると、その生徒は、1列目の2番目の生徒にボールを打つ。そして、隊列最後の生徒に交互交差して渡る。最後の生徒は、駆け上がりライン上に並び、再びボールをサーブしてゲームを始める。女子生徒は、このゲームのために、男子生徒のチームに対戦するチームを作った。この運動とリレー・ゲームは毎日、バレーボールの試合の前に行われた。第3週目の技能練習には、まだ大きな関心が見られた。子どもたちがゲームをしたとき、自分や友達に進歩の跡が見えることについて度々話が及んだ。子どもたちは、この進歩が練習の成果であると感じていた。(Wood and Cassidy, 1927, pp. 235-236)」

第4段階のリレー形式の練習は、工夫した技

術が連続的に行え、しかも実際のゲーム場面と同じように瞬時に状況が変化する中で技術を成功的に用いてゲームを展開することが想定されている。

このバレーボールの実践は、問題の自覚、分析、ゆっくりした練習、簡易のゲーム、ゲームの段階を経て技術向上を図る。そして、教師の助言を得ながらも、生徒自身が相互に協力して考え、話し合い、練習やゲームを通して技術の獲得と技能の向上を図るものであったが、問題の自覚・分析の点で不十分さが認められた。

第3節「自然な体操」の立ち遅れの要因

「自然な体操」は、心理学や教育学に基づく革新的な教授・学習方法であるにもかかわらず、教授方法として定着することなく一時的な「ブーム」に終わってしまった要因について以下のように考察する。第1に「自然な体操」という名称が古い体操のイメージ、すなわち、機械的・形式的な反復練習の意味に理解されたので、「自然な」という言葉が、興味や関心といった「情動」として受け止められ、疑問や工夫といった「思考」として理解されなかったことが考えられた。つまり、「自然な体操」は目的から内容が導かれる体操の教授方法と同様に解釈される場合が多く、フォザリンガムの実践に見られるように、授業場面から具体的な学習内容が形成されるものとして理解されなかったのである。

第2に「自然な体操」の教授方法としての有効性を検証する評価基準は、目標の到達度が成長、知識、技能と習慣、態度の4項目に分類され、学年毎に評価されるものであった。また、具体的な検証方法は、アチーブメントテスト、筆記テスト、社会的特性テストに過ぎなかった(Wood and Cassidy, 1927, pp.227-230)。この中で現場の教師や子どもに最も納得できるものは、短距離走やバスケットボール投げなどのアチーブメントテストであったと思われる。すなわち、「自然な体操」の授業の評価基準が確立していなかった問題があげられる。

第3に、スポーツの戦術や戦略は、技術とと

もにスポーツの文化的本質であり、子どもの知的発達を促すものである。しかし、この戦術や戦略などの主要な教育内容がウッドの『新体育(1927)』において考慮されていなかったことが考えられる。「自然な体操」の実践例は簡単な技術練習で占められ、ゲームの戦術や戦略の実践例は提示されていない。(Wood and Cassidy, 1927, pp.232-262)。

第4にウッドの『新体育(1927)』の体育目標において身体発達や技術獲得、知的発達よりも社会性の発達が優先され、強調されたところにスポーツ文化の本質を体育固有の目標として強調されなかったこともあげられる。そして、社会性の発達の強調は教材としてのスポーツの体系的な教授方法が理論化されなかった要因となったと考えられた(新野, 2011, p.26)。

第5に教授方法の実践的問題として教師の専門性の問題があった。「自然な体操」において教師は運動技術について理論的・実践的にも精通している必要があり、子どもの発達特性や技術習得の程度を即座に判断し、必要な指導的助言を与えるだけの指導力量が必要とされた。ホーレスマン・スクールではフォザリンガムをはじめとする体育の専門教師が配置されていたので、ウッドの教授方法論を実践することが可能であり、「自然な体操」はその本来の進歩的な指導性を発揮することができた。しかし、多くの州では体育が必修化されておらず、一般の教師が体育を担当していたために、適切な指導を行うことができなかったことが考えられる(注8)。

さらに、多くの教師は嬉々としてスポーツに興じる子どもの姿に斬新さと進歩性を見いだしたので、子どもの認識能力の発達を通して興味・関心を探求心へと高める必要性を認識することができなかったと思われた。著者のこれらの解釈の妥当性は、1930年代のアメリカにおいて、「自然な体操」が、技術練習、準備運動、あるいは体操としてマニュアル化されて紹介されていたことから伺われる(Wiley, 1930, pp.33-35 (55))。

第6に「自然な体操」はウッドにとって学外のスポーツと学校体育を統合する試みでもあっ

たが、技術よりも社会性が重視され、教師の資質が制度的に保証されていなかったため、スポーツの普及にともない放任主義的傾向が見られ、一時的なブームに終わった。

すなわち、ウッドの競技スポーツと学校体育の調和的発展という方向性は、彼の教材論からも以下のように伺われる（新野,2011,p.27）。ウッドは、『新体育（1927）』において教材論を「日常生活の自然な運動」「自由遊戯とゲーム」「競技とスポーツ」「演劇的表現」「社会奉仕と労作活動」「自己試験的運動」「個人矯正的運動」「レクリエーション的運動」の8領域から構成した。8領域は「大脳・筋活動」という運動概念で統一されていた。8領域の設定には、諸スポーツ団体と学校を統合することが意図されていたと読み取られる。

それまで、学校内の競技スポーツと学校外の社会教育団体が運営するスポーツ活動は個別に行われ、貧しい移民の子どもが学ぶ公立学校の体育授業においてスポーツが教授されることはなかった。しかし、スポーツを学校体育の教材の中心に位置づけることで、新移民の子どもと旧移民の子どもが学校の内外の生活全体で学び合うことが可能となったのである。つまり、ウッドは体育の授業において学内と学外のスポーツ活動を教育的に関連づけ、子どもの社会的適応能力の形成を効率的に行うことが可能であると考えたのである。したがって、学校内外のスポーツ活動の社会的・教育的統合化は体育授業の教授方法として「自然な体操」に結実したと言える。また、「自然な体操」における技術獲得の問題解決学習は、共同学習による認識能力の形成と思考能力の発達だけでなく、社会性の発達を実現する有効な手段と見なされるのである。

しかし、「自然な体操」は、スポーツの技術構造と指導方法に関する科学的理論や実践の経験に裏づけられた指導者の能力に大きく依存するものになったのである。そして、この指導者の資質が新体育のその後の批判を招くことになり、結果的に「自然な体操」は一時的なブームに終わってしまったのである。

Ⅲ. 結論

ウッドの「自然な体操」は、自然な方法という一般教授方法と同じ過程から構成されていた。すなわち、「自然な体操」の学習過程では、①問題の自覚、②問題の分析、③ゆっくりとした練習、④簡易のゲーム、⑤ゲーム検証という過程で構成されていた。この学習過程で子どもは試しのゲームで問題を自覚し、相互観察の中で運動技術を分析し、練習方法を考案し、ゲームで実践・検証して次の課題を明らかにすることが目指された。

ホーレスマン・スクールのフォザリングムの実践は、当時コロンビア大学教育学部の附属校においても体操授業が支配的であったが、子ども中心に技術の認識能力と思考能力の発達と技能向上を図ることに加えて、社会性の発達を図ることが可能であるとの教師の確信を表明したものであった。

ブレイスの実践では、指導者中心の技術獲得の教授方法が示された。これはウッドが当時の競技スポーツのコーチの指導方法の合理性と教育的有効性に着目していたことによるものであった。コーチの指導方法を教育学・心理学の理論により生徒中心に問題解決を図る学習方法が「自然な体操」であった。しかし、実践現場では生徒主導ではなくスポーツ指導者やコーチによって考案された技術練習が新体育の有効な教授方法として安易に受け入れられた。そして、この技術練習がゲームの前段階として行われたために、「自然な体操」が「準備運動」として理解され普及していく要因になったと考えられた。

さらに、オークランドのパレーボールの実践では、「自然な体操」が教師の助言を得ながら子どもが課題を形成し、その解決を図ることが意図されていたが、問題の自覚・分析の点では不十分な実践であった。

「自然な体操」では、子どもの技術認識と思考を通して技能向上を図ることが、本当の子どもの興味や関心などの欲求を充足することであると考えられていた。また、情動レベルの欲求

を認識レベルの要求や必要に高め、問題の合理的解決方法を協同して学ぶ中で他者や地域社会、国家に対する義務や責任を遂行する能力を形成することや人権尊重の基礎を形成することが目標とされた。つまり、アメリカ社会において求められる民主主義の基本を具体的な活動を通して学習することが意図されていたのである。しかしながら、競技スポーツが支配的になりつつあり、各種教育団体によるスポーツ大会が一般化していく中で体育授業においてスポーツ教材が多くなると、技術獲得やゲームの質的向上を効率的に進めるための技術練習が「自然な体操」として一般化するに至ったと考えられた。また、ウッドの「自然な体操」で形成すべき技術獲得を通しての認識能力は、移民児童の帰化と社会的適応を目指す社会的目標よりも相対的に低い位置づけとなっており、また、戦術や戦略などの思考能力の形成に有用な要素が看過されていたことが目標論上の問題として確認された。

換言すれば、「自然な体操」は、体操という言葉が教師や生徒に技術練習のイメージを与えやすく、またグループ活動で子どもが思考能力を身につける機会の多い戦術や戦略の指導を含んでいなかったために、スポーツやゲームの準備運動、あるいは単なる体操として解釈されてしまった。したがって、「自然な体操」は教授方法として理解されるのではなく、運動教材として容易に実践されてしまった。このことが戦後日本の新体育の教授方法の検討の立ち遅れ問題の一つの誘因になったと考えられる。

— 注 —

(注1) 小田切に代表される日本のアメリカ体育史研究においてnaturalized physical educationは、自然な方法(natural method)や自然な活動(natural activity)に即して「自然化された体育」と訳されていた。(小田切, 1975, pp. 247-261)しかし、著者は、naturalizeの語原の「帰化させる」「市民権を与える」の意味にしたがって、ウッドの新体育論の本質が「帰化させる」という「アメリカ人化」にあることを明示する

ために「naturalized(帰化させる)」とした。

(注2) ウッドは、新体育論の教授方法について「大脳・筋活動には思考をとまなう内容が存在し、子どもは、この分野において学習の方法を学ぶことができる」と考えていた。「自然な方法」は次の順序に従って行われた。

- ①生徒は目的的な運動を行い、問題を自覚する。
- ②討議がなされ諸々の考えが出される。
- ③これらの考えはまとめられ構成される。
- ④有益でないと判断された考えは排除される。
- ⑤解決は活用される。

ウッドは、子どもが自分の活動を導く反応結合を形成し、自分の知性を利用し、思考を学ぶところに「自然な方法」の特徴があり、子どもは体育において一般的な方法を学ぶことができると考えたのである。

(注3) ウッドは、スタントを「個人が自分のできばえ(accomplishments)を以前のものや他人と比べて上手くなっていることを確かめたいという本能的な欲求を満たすような自然な運動から構成されている」(Wood and Cassidy, 1927, p. 87)と定義しているが、形式体操の用語であり、誤解を招く要素の一つとなったと思われる。

(注4) コロンビア大学教育学部附属学校のホーレスマン・スクールの実践記録集である(Physical Education, 1913, Teachers College Record, pp. 107-109)は小学校のカリキュラム特集号であり、現場の教師達が担当科目のカリキュラムを紹介している。体育については第1学年から3学年まで共通して行進、体操、遊戯運動(game)が行われ、第4・5学年では遊戯運動でリレー競走、ダンス演劇活動が追加され、第6・7学年ではバスケットボールと野球のゲーム、水泳、ダンスが追加されている。ボール運動は器械体操と関連づけられ、身体発達だけでなく表現力や気晴らしなどの手段として提供されていた。なお、第4学年から6学年は、体育の専門教師が担当し、1週間あたり、4・5学年では80分、6学年では100分の時間が割り

当てられている。

(注5) もう一つの事例は、ダンス・演劇である。ダンス・演劇は「音楽、詩の技術 (arts)」に属するものあり、表現の度合や正確がそれらとは異なる。ダンス・演劇は技能ゲームや職業と同じ技術練習 (technical training) と関連しており、運動技術の基礎をなすものである。」(Teachers College Records, 7/8, 1908, p. 303)

(注6) 『新体育 (1927)』の第20章は「自然な体操」を含む「自然な方法」の以下の実践例から構成されている。バレーボール、演劇活動、女子高校生のホッケー、ホッケーの自然な体操、バスケットボールの自然な体操、バスケットボールの特殊な体操練習、水泳、健康教育、インディアン生活の演劇化、ギリシャゲーム、第1学年のゲーム、第3・4学年のチームゲーム、第4学年のゲーム、体育と健康の関連プロジェクト、人命救助活動、キャンプ、室内競走、大学新生の自然な体操。「自然な体操」の実践例は簡単な記述のものが多数を占めている。

(注7) この授業は、教育研究所 (teachers' institute) の公開研究授業であり、事前の教師へのアンケートで第一に取りあげて欲しいテーマが「自然な体操」であった。そして、「自然な体操」が自然なプログラムの全てではなく、到達目標の諸要素を練習するものにすぎず、その練習は個々のゲーム場面で生じる必要性に動機づけられていることの説明がなされた。(Wood and Cassidy, 1927, pp. 233-234)

(注8) 第一次大戦以前に体育関連の法律が制定されていたのは8州に過ぎず、大戦後は17州で新たに制定された。大戦前の法律では、カリセニクスの指導が大規模校に指示されたが、大戦後は教育的効果のあるスポーツやゲームに重点が移された。(Van Dalen and Benett, 1976, p. 430) 大戦前高校の男子生徒の体育教師にスポーツコーチが採用され、体育の担当も任されたが、コーチたちは女子体育の指導は家庭科や他教科の教師に任せた。(Lee, 1983, p. 176)

— 文献 —

Brace, D.K., (1925) A Natural Program of

- Physical Education for College, American Physical Education Review, 30 (4) : 202-207.
- Fotheringham, E. (1908) Physical Education Grades IV and V, The Curriculum of the Elementary School Reprinted from Teachers College Record 7 (1-4), 8 (1,3,4) : 301-304.
- 井上一男 (1970) 学校体育制度史. 大修館書店: 東京.
- 岸野雄三 竹之下休蔵 (1983) 近代日本学校体育史. 日本図書センター: 東京.
- Lee, M. (1983) A History of Physical Education and Sports in the U.S.A., John Wiley & Sons : New York.
- McPherson, Frances A. (1965) Development of Ideas in Physical Education in the Secondary Schools in the United States between 1889 and 1920, Ph.D. Dissertation, University of Wisconsin : Wisconsin.
- 小田切毅一 (1975) アメリカの新体育とスポーツ・レクリエーション. 成田十次郎編 体育史. 講談社, 東京, pp. 247-261.
- 小田切毅一 (1981) ウッド／キャシディ『新体育』. 松田岩男, 成田十次郎編 身体と心の教育. 講談社, 東京, pp. 153-174.
- Rice, E.A. and Hutchinson, J.L. (1958) A Brief History of Physical Education, 4th ed., The Ronald Press Co. : New York (1st, 1926) .
- 新野守 (1989) T. D. ウッドの初期の体育論に関する研究: 1891年から1910年前を中心に. 滋賀大学教育研究所紀要, 23 : 47-53.
- 新野守 (1993) T. D. Woodの体育論の展開に関する研究: 『健康と教育』を中心に. 京都体育学会紀要. 8 : 27-34.
- 新野守 (2011) 「naturalized (帰化させる)」概念からみたT.D.ウッドの新体育論の新たな側面に関する研究: 『新体育』を中心に. 日本教科教育学会誌, 33 (4) : 21-30.
- Physical Education (1913) Teachers College Records, 3 : 107-109.
- Van Dalen, D.B. and Benett, B.L. (加藤橋夫監訳) (1976) 新版体育の世界史, ベースボールマガジン社: 東京.

Weston, A. (1962) The Making of American Physical Education, Appleton-Century-Crofts : New York.

Wiley, R.E. (1930) Natural Gymnastics, Journal of Health, Physical Education and Recreation, 1 (5) : 33-35 (55) .

Williams, J.F. (1927) The Principles of Physical Education, W. B. Saunders Company : Philadelphia.

Wood, T.D. (1910) Health and Education : Part 1 Ninth Yearbook of the National Society for the Study of Education, Public School Publishing Company : Illinois.

Wood, T.D. and Cassidy, R.F. (1927) The New Physical Education, MacMillan Co. : New York.

(平成25年12月23日受付, 平成26年2月5日受理)